

## ミュンスターでの生活

—「好きな場所で研究しよう」—

## My Life at Münster:

## A Joy of Learning and Happiness

一橋大学大学院博士後期課程・ミュンスター大学博士課程 瀬川 真吾

SEGAWA Shingo

(Doctoral Scholar, Faculty of Social Sciences, Hitotsubashi University

Doctoral Scholar, Department of Philosophy, University of Münster)

キーワード：ドイツ、海外留学

### はじめに

「ドイツのミュンスターという街の大学に留学している」。こう言うと多くの日本人は、「ミュンヘンか」と聞き返してくる。日本で有名な某旅行ガイドでも、この街の紹介は一ページのみである。私自身も留学するまではミュンスターという街など聞いたこともなかった。そんな私がなぜこの街に留学することにしたのか、そこに至るまでの経緯と、留学してから現在に至るまでの研究生活をお伝えできればと思う。

### 留学するまで

私は現在、一橋大学大学院社会学研究科博士後期課程およびミュンスター大学哲学部の博士課程に在籍している。以前から漠然と留学したいと考えていた私は、博士課程に進学後、一橋大学からの助成を受け、二ヶ月という短期間ではあったが、ドイツのイエナ大学に留学することができた。ほぼ友人がいないということ、とても小さな街で外的誘惑が少ないということもあったと思われるが、私はイエナで驚くほど研究に集中することができた。しかし二ヶ月はあっという間に過ぎ、もっと長く滞在していきたいという強い思いはあったが、日本に帰国することになった。この短期留学はひとつのことを私に悟らせた。「どうせ研究するなら、自分が好きな場所で研究しよう。」

二月初旬に日本に帰国してほどなく、私はあるドイツ語文献の翻訳プロジェクトに参加させてもらえることになった。その本の著者がミュンスター大学の現在の私の担当教員であるミヒャエル・クヴァンテ教授(Prof. Dr. Michael Quante)である。このプロジェクトを介して、私は彼のもとに留学することを決めた。当時は二年間の私費留学で、その間に博士論文を執筆し、一橋大学に提出しようと考えていた。そのときのメールを見直してみると、この選択がベストであろうと友人に送っている。とはいえ、考えていることをそのまま行動に移せるとは限らない。私はクヴァンテ教授に連絡を取れずにいた。というのも、連絡をとってしまっただけで後には引くことはできないだろうと感じていたからである。時が過ぎるのは早いもので、あっという間に年が明けてしまった。そんな折、一橋大学から一ヶ月の海外での研究滞在助成金の臨時募集の知らせを受けた。そこには受け入れ教員と連絡済みであることが応募条件として設けられていた。臨時募集ということもあり、締め切りまでは二週間程度だったと記憶している。もはや躊躇している猶予はなかった。私は意を決してクヴァンテ教授に二年の予定で研究滞在したいという連絡を入れた。二週間後から二年の滞在をしたいという計画性のかける希望であったにもかかわらず、彼は快く受け入れると言ってくれた。私はこうしてミュンスター大学に留学することになった。

### 留学してから—初期—

ミュンスターは、ケルンやデュッセルドルフといった有名な街もあるノルトライン・ヴェストファーレン州に属し、多くの人が大学関係の仕事に就いている、いわゆる典型的な大学街である。中心地からいずれかの方角に自転車で二〇分も走れば、馬や牛などに遭遇する静かな街でもある。そんなのどかな街で私が最初に、そしていまも苦労しているのは、ドイツ語という壁と自分から主張せねば仲間に入れないというドイツの文化である。程度の差はあれど、言葉の壁はすべての留学経験者が一度は通る道だと推察されるが、その例にもれず、私もドイツ語という高い壁に悩まされ続けた。日本にいた頃は文献を読むためのドイツ語であったが、生活するためにはいくらドイツ語文献を読めてもほとんど意味がない。そもそも文献を読むだけなら日本でもできる。こちらに来た理由のひとつは、クヴァンテ教授をはじめ、ドイツの研究者と議論することである。もちろんいまではかなり複雑な議論をドイツ語ですることができるようになってはいるが、依然として満足いくようなレベルには達していない。

第二の点は、日本と大きく異なる点だと感じている。クヴァンテ教授のゼミでアジア出身者は私だけである。そのこともあって、私はゼミの誰かが話しかけてくるだろうと期待していたが、実際には誰も私に話しかけてくることはなかった。これには少々驚いた。日本であれば大学院ゼミの中にヨーロッパ出身者がひとりいるという状況であるならば、おそらく日本人から話しかけ、場合によってはあれこれと世話を焼くことであろう。しかしこちらではそういった淡い期待は、

期待のまま終わる。だからと言って彼ら・彼女らが冷淡だというわけでは決してない。大切なのは、こちらから歩み寄らねば何も始まらないということである。これが言葉の壁と相まってなかなか難しい。この二つはドイツで研究をしたいならば克服せねばならないものであることを理解しながらも、留学当初は終わりの見えないトンネルにいるような気分であった。

### 留学してから—中期—

最初の一年を大学と市が運営する語学学校に毎日通い続けた結果、言葉の問題は根本的解決には程遠いとは言え、徐々に解消されていった。そのことによって留学当初はまったく理解できなかったゼミや講義、講演会の内容が少しずつ理解できるようになり、ゼミ生とも話をするようになっていった。ここで付言しておきたいのは、私はゼミ生と自然に話せるようになるのに一年余りを要したが、場合によってはそれ以上かかることもあるだろうということである。しかしゼミ生と打ち解けるには長い時間を要するのが普通なので、すんなりと仲間に入っていくことができなくても落ち込まなくていい。私のケースで言えば、多くの方は私に関心を持っていなかったが、そうした状況でも自分を気にかけてくれる人はひとりか二人はいて、そうした人を見つけられたことが大きかったように思う。

ミュンスターでの研究生活に慣れ始めた私は、いつしか日本ではなくドイツで学位を取得したいと思い始めた。留学以前には高すぎると感じていたことが、いつの間にか特別なことではなくなっていた。しかし私は、クヴァンテ教授にこのことを伝えることがなかなかできなかった。というのも、彼とはゼミや講義で会うだけの間柄で個人的なコンタクトがほぼ皆無だったこともあり、これは当時の私にはなかなか勇気のいることであった。しかしもし学位をこちらで取得しようとするならば奨学金を獲得せねばならない。念頭にあったのは JASSO の奨学金であり、応募の締め切りが迫っていたことにも背中を押され、私は教授に面会のアポをとり、博士論文の構想を見せ、無事に学位論文の面倒を見てくれることになった。ここまで留学してから一年半が経っていた。この進路相談を機に彼とは親しくなることができ、私が現在所属しているミュンスター大学の生命倫理学研究所のメンバーに引き入れてくれた。

### 留学してから—現在—

JASSO から三年間奨学金を支給していただけることが決まってから程なくして、私はクヴァンテ教授に研究チームの中に自分も研究する場所が欲しいということを伝えた。それまではもっぱら大学の図書館で黙々と研究していたのだが、これは二つの点でよくないと個人的に感じていた。第一に、研究に関する議論をするためのドイツ語が上達しない。第二に、議論なしでは良い論文を書くことができない。これら二点を改善する手っ取り早い方法として思いついたのが、議論を

しなければならない状況に我が身を置くことである。はたして自分から研究室が欲しいと言っていいものかどうかかなり逡巡したが、とりあえず訊いてみた次第である。驚くことに、私は訊いた三分後に共同研究室にあるひとつの机を与えられ、そこに座っていたのである。やはり待っているだけでは何も起こらないが、自分から行動を起こせばたいいの場合、こちらの人は快く応じてくれるのである。

## 終わりに

私は、やりたい研究をやりたい場所でできている日々にとっても感謝している。研究チームに所属してからは、私と同様に博士課程に在籍している、あるいはポスト・ドクターの人たちと時には長時間に及ぶ議論を交わしながら、時には雑談を交わしながら切磋琢磨し合っている。研究面に限らず、生活面においても、これまでいろいろな人に助けられてきた。そうした人たちに恩返しをする方法はいくつもあるだろうが、その大きなひとつとして、学位を無事に取得するということがあげられると思う。この目標を達成するためにも、いままで通り研究に邁進していきたい。